

院學生を含んで約一五〇名の學生が研修中である。研究の傾向としては、由來大した偏向の見られないことが本講座の特色であるが、強いていえば、戦後アメリカ文學に對する興味が増加したことが注目される。

英文學會も、戦時中はほとんどその活動を停止するのやむなきに至つたが、昭和二十五年公開講演會の復活、翌年の『アルビオン』の復刊を契機として、ふたたび活潑な活動を開始した。この間昭和二十三、四年および三十年にはエドマンド・ブランデン、二十六年にはG・S・フレイザー、二十九年にはD・J・エンライトの講演會をおのおの開催し、それぞれの意味において、現代のイギリスを代表する詩人の聲咳に接する機會を持つことができたのは得がたい收獲であつた。

西洋文學第三講座 (フランス語學フランス文學)

本講座が設置されたのは大正十四年五月であるが、フランス文學という科目名は、文科大学開設當時の文科大学規程のうちに、すでに英文學・ドイツ文學と並んで正科目として掲げられていた。しかしこの科目の實質は、大正八年當時の第一高等學校太宰府教授がフランス語學フランス文學研究のため在外研究員を命ぜられて翌年二月出發し、越えて十年十月フランスに在留中、本學助教に任ぜられた時に芽生えたといえよう。太宰府教授は十二年二月歸國、四月から初めて正科目としてフランス文學を擔當し、専攻の學生を前に「フランス文學史」の普通講義と第一回講讀の各二時間の講義を開いた。翌年度には特殊講義「La Comédie humaine」と第二回講讀が加わり、翌大正十四年五月には、いよいよ本講座が西洋文學第三講座として設置されることとなつた。かくて太宰府教授は本講座所屬となり、科目においては三回生に課される演習が加えられ、全科目の組織が完備した。その後この五種目の講義はいずれの一つをも缺くことなく、むしろその時間數を増加した。

開講後間もなく、太宰助教教授のほか、つねに二、三の講師が囑託されたが、落合太郎、ロベール、ウァグネル、ボノー、バレ、ガルニエ、ロートマン、イズレル、ベルトランの各講師で、なお落合講師は昭和六年三月助教教授に任ぜられ、太宰助教教授は同八年三月に教授に昇任したが、落合助教教授はさらに十二年十二月教授に進むとともに言語学講座に轉じた。その後は伊吹武彦、市村恵吾、林憲一郎、モンテニの各講師がそれぞれ太宰教授を助けた。

講義の中心目標は、いうまでもなくフランス文學のもつとも主要な時期、すなわち十七世紀と十九世紀であり、

また文學様式の上では、その重要さから見て、古典戯曲・近代小説・批評・抒情詩などに攻究の主眼が置かれたのは當然であろう。さらにまた人と作品との配列からは、偉大な作家、すなわちこの民族の文學集團を代表してその特性を千古に輝かす最中心の人びとが、まず最初の研究對象として選ばなければならない。この三つの指針に従つて、開講以來各講義の内容はほぼ一定したものであつた。



太宰教授

を説述する目的のもとに、「フランスの言語及び文學の歴史概説」、「フランス文學史」、「十九世紀フランス文學史」などの題目を掲げ、主な時代に中心を置き、できるだけ正確な鳥瞰圖的知識を授けようとした。講義は二年間にわたり、第一回生に課するものと第二回生に及ぶものとで、自ら使用テキストの性質、その製作年代を異にした。すなわち初年にはおもに十七世紀古典文學の代表傑作、ことにラシーヌ悲劇とモリエール喜劇、しかもそのもつとも特徴あるものが用いられ、第二回には他の重要な文學時期である十九世紀のものからその名作が講義された。シャトーブリアン、ローマン派の詩、ミュッセの戯曲、バルザック、スタンダールの小説、サント・ブーヴの

批評などである。しかし時にはやや遑つてルソーの書を解説し、また現代に近い作家のものが使用されたこともある。

つぎに主として第二回生に課せられる特殊講義は、一般の大勢敘説でなく、限られた特定問題についての考究敘述であつて、従つてあるただ一つの作、ただ一人の作家を探り上げて探究すること、あるいは一つの時代全部を特に詳しく論究すること、または詩・戯曲・小説・批評などの様式別に、その一つを歴史順に眺めわたす方式など、ほとんど無限に題材の變化があるが、なるべく前學年に學生の學んだ講義内容と照合しながら、一年に一乃至三種類が行われた。それらの題目は講座開設以來、たとえば十六世紀のモンテーニュ、十七世紀のパスカルなどのモラリスト研究、古典悲劇總説、比較文學的にみた十八世紀とローマン時代、バルザックの小説、サント・ブーヴの批評、近代現代のフランス戯曲などが主なものであつた。演習は、第三回生に卒業論文を起草する準備のかたわら、深く原典を讀み、理解して味わう能力を伸ばすために設けられたもので、その目的にそつて教材として、テニス、ブリュンチエール、バレス、モラスなどの批評書がしばしば用いられたが、ゾールジェ、エストーニエ、ボワレーヴなどの現代小説、キュレル、ドネーなどの現代戯曲の選ばれたこともあつた。

さて戦後の昭和二十四年五月、太宰教授は停年により退官、その後は當時の第三高等學校伊吹武彦、生島遼一兩教授が講師となつて授業を擔當したが、伊吹講師は昭和二十五年四月本學教授に轉じ、本講座を擔當することとなつた。そこでまず考慮されたことは、わが國におけるフランス文學研究が戦後著しく進歩發展しつつあるのに鑑み授業内容を飛躍的に充實することであつた。もとより本講座開設以來の精神―すなわち十七世紀の古典作家を中心として十九世紀作家に説き及ぼすという方法は、不動のものとして繼承されたが、しかし十八世紀の重大性や現代の重要性を無視することはできないので、本學人文科學研究所桑原武夫教授、および教養部生島遼一教授を授業擔當として新しい發足をすることとなり、さらに昭和二十六年度からは教養部のフランス語を擔當する田中俊一、渡

邊明正、林憲一郎、本城格、後藤敏雄の各助教授五名が加わつて、研究・講讀・演習の各分野にわたり、かつてない充實ぶりを示すに至つた。なお中世文學の研究には専門の學者を必要とするので、二十八年度には東北大學有永弘人教授を、また十六世紀文學の研究についても、同様の理由によつて東京大學渡邊一夫教授を招いて、それぞれ集中講義が行われたが、この種の試みは本講座開設以來はじめてのことである。

授業内容の充實は以上のようなのであるが、それと並んで注目すべきことは、戦後本講座専攻の學生が著しく増加したことである。附表にも明らかのように、従來は毎年一名乃至十二名であつた卒業生が、二十八年度には舊制二四名、新制二〇名、計四四名の多數にのぼり、二十九年度には舊制六名、新制三三名の學生を送り出すに至つた。

これら多數の學生が提出した卒業論文の題目を通じて、その一般的傾向を見よう。太宰教授退官の年である昭和二十四年を境として、その前後により第一期・第二期と分ち、それぞれについて論文題目を時代別にすると、まづ第一期は、

十五世紀(一)、十六世紀(三)、十七世紀(一七)、十八世紀(五)、十九世紀(三四)、〔ローマン派(一一)、寫實派(一九)、象徴派(四)〕、二十世紀(二〇)、その他(二)

となり、十九世紀作家の研究がもつとも多く、十七世紀古典作家のそれは半数であり、現代作家がこれにつづき、十五、六世紀・十八世紀に關するものは少ないことが分る。十九世紀作家のうちとくに多く取り扱われているのは、スタンダール(四)、フローベール(四)、その他の寫實派作家(九)であり、これに比してローマン派作家(六)は少なく、象徴派に至つてはわずか(二)に過ぎない。

つぎに第二期は

十五世紀(〇)、十六世紀(四)、十七世紀(一三)、十八世紀(七)、十九世紀(五一)、〔ローマン派(二)、寫實派(三二)、象徴派(一八)〕、二十世紀(五一)

のように、十九・二十世紀の作家研究が壓倒的である。十五・十六・十八世紀の研究が少ないことは第一期と比較して變りはないが、十七世紀作家に比して十九世紀・二十世紀作家の研究が多いのは、第一期とやや異なる傾向である。十九世紀においてはスタンダール(一一)、フローベール(二〇)の研究が比較的多いのは第一期と同様であるが、象徴派の研究がボードレーール研究を含めて(一八)となり、次第に數を増して來ていることは注目される。なお二十世紀作家のうちではジイド(一二)、ヴァレリー(八)などの研究が多い。

しかし眞の問題は何が題目として選ばれるかよりも、むしろ如何にしてその題目が扱われているかにある。最近二、三年間の傾向を見ると、文學的エッセーはほとんど影をひそめ、實證的な精密研究が本流となつたこと、とくに最近フランスの學界に地歩を確立しつつある文學の統計學的な研究が、幾人かの學生によつて採用されはじめたことをまず擧げねばならない。つぎに作家の文體を科學的に研究するいわゆる「文體論」の方法も、漸次試みられているのは特筆すべきことであらう。

最後に學界との關係について一言しよう。わが國におけるフランス文學研究者の團體としては「フランス文學會」があり、もつばら東京において總會を開催、その内容も一、二の講演が行われるのみで、會員の本格的な研究發表はなされていなかった。そこで伊吹教授らは昭和二十五年秋の總會を京都において開催することを申し出で、その年十一月、全國的な總會および一般の研究發表を行なうことに成功、當日「フランス文學會」は現在のように「日本フランス文學會」と改稱され、はじめて會則を作り、學會としての體制を整えるに至つた。このような學會發足のための機縁をつくり得たことは、本講座關係者のひそかに誇りとするところである。以來伊吹教授は同學會の評議員となり、さらに二十七、九年の兩度にわたり、主催者として京都で總會を開いた。なお三十年五月學會の近畿支部が正式に發足、伊吹教授は支部長に選任されて今日に及んでいる。また昭和二十九年十一月附をもつて伊吹教授はフランス政府から *Officier de l'Instruction publique* に敘せられ、勳章を授けられた。